

出水市・八代市の

文化財をたずねて

古藤 田

(会員・弥生町江良)

太

十月十二日、午前六時を少し廻って小野英治氏の車がやってきて、太田一二、五十川千代見氏と四名揃って一路宮崎へ、ここから小林に転じ、更にえびの市、大口市を通じて出水市に到着したのは午后二時半頃であった。小野氏は二回目とあって方向感覚よろしく早速野間の関所跡を訪ねる。

(一) 野間の関跡

このあたりは一時豊臣秀吉の直轄領となったが、六年後の慶長四年(一五九九)朝鮮役の論功行賞として、再び島津義弘に与えられて薩摩領となったものである。當時、隣国肥後に加藤清正が厳然とひかえ島津と相對していた。

肥後口を扼する重要地点である野間関ができたのは慶

長五年であつた。この関所を守ることは出水地頭(地頭とは何んと



野間関所跡記念碑

古い言葉であろう、代官と云う方が理解し易い)や、郷士(薩摩では鹿兒島に住む武士を城下士、外城に住む武士を郷士と呼び、住む場所を麓と言った)にとつて重大任務であつた。それには大きく二つの理由が考えられる。独自の郷士制度(外城制度)で固められた薩摩藩は世にも稀な支配体制をつくりあげたが、この封建社会を維持するために、外部からの新しい知識、文化の流入を極力防止する必要があると考へて、一切橋さえ架けずに採られた排他政策が、慶長五年と云う年を迎えても、他藩

との往来を厳しく取締ることをした。それこそ「二重鎖国」であった。薩摩人は、この二重鎖国のもとで言語・風習・性格まで他藩と著しく異なるものとなった。

野間の関開設の第二の理由は、一色次郎氏の『幕末南海秘話』で有名な「奄美諸島の黒砂糖」が物語るように、財政破綻を前にした薩摩藩の専売制度にあった。専売制の対象になったものは黒砂糖だけではなく、タバコ、鰹節、ナタネ、樟脳も厳重な専売制のもとにおかれたが矢張り主役は奄美の黒砂糖であった。当時の薩摩藩の内状を紹介すると、文化年間あたりから藩の負債が急増してくる。参勤交代の途中、藩の費用が全く無くなって、メソッお構いなしで借りて歩いたと、窮乏の有様が伝えられている。

第二十五代島津重豪、第二十六代斉宣、第二十七代斉興、第二十八代斉彬等の妻妾一族郎党の生活費、度重なる江戸藩邸の火災、鹿児島大火による城の焼失、もつと遡ると、宝暦年間の有名なあの木曾川の治水工事、これこそ薩摩には何の関係もない工事であるが、幕府の命令で藩が実行せねばならず、最初千人の兵と人夫を送った。工事費も最初三十万両用意したが、焼け石に水、責任者

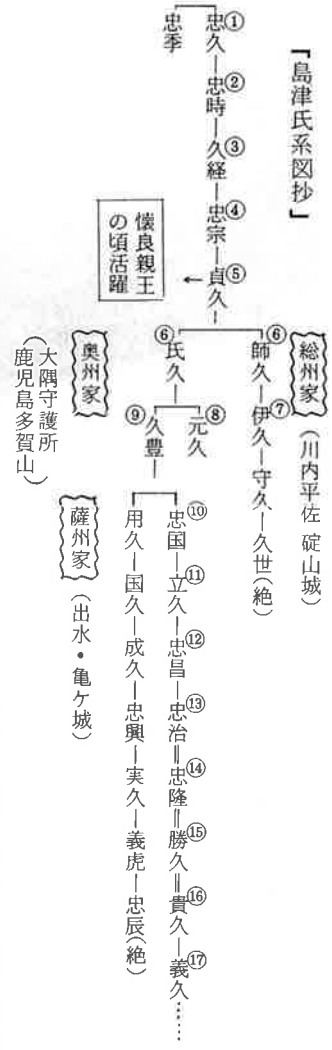
の平田鞆負は大阪で更に二百万両調達して工事を完成させたが、返済のめどがつかず責任を負って自刃した。平田と前後して自刃する者五十余名に及ぶ悲壮な事件が発生する等で、藩の負債はつもり積って五百万両に達した。

この島津藩が、弘化の末頃（一八四四―四七）には、逆に三万石の貯蔵米ができた。そればかりか次々と金蔵が建つ始末、この莫大な資力が結局、明治維新の際、薩摩の軍事費になっている。島民に対する苛斂誅求のもとに得た奄美大島の黒砂糖と云う専売品が、幕末の歴史を書きかえ、新生日本のために役立ったことになる。莫大な藩の負債が藩の専売によって、大阪方面で巨利を挙げ、て支払われたのである。

この専売品が、他国者から仲買されたり、農民自身が国境を越えて売りさばくのを防ぐ為に国境警備を嚴重にし、封建政策を固める上から、野間の関所は大きな使命を帯びていたわけである。薩摩は三方を海に囲まれている、陸接国境線上にある野間関は重視され、高山彦九郎、頼山陽等著名士の通過さえ、悲喜交々のエピソードを残している程、ここを通過することは容易でなかった。

今や、この難関の跡には、僅かの濠趾と古井戸が残さ

「島津氏系図抄」



れているのみであった。

ここを出て出水の街並を走っていると、白いペンキ塗りの標柱が目にとまった。

書いてあることが面白い。

「負けるな、ウソを言うな」

いかにも薩摩人気質を表わしているではないか。このことで車中は暫らく談笑が続いた。

(二) 薩州家島津氏墓地

島津家は六代師久みちひさ、氏久うぢひさの兄弟が総州家、奥州家に分れ、奥州家系島津第十代忠国の時に、忠国の弟用久もちひさが薩州家を興した。

この戦国期では、

島津家においても他家同様、下剋上の争乱が絶えなかつた。薩摩におい

てはこの頃、「国一揆」と称して、

小地頭や武士達が、

自分の土地を守るために連合して守護大名の島津氏に当る一揆が続いた。島津氏にとっては、守護大名から戦国大名への移行と云う歴史的必然であった。

応永三十二年(一四二五)忠国が、三州の守護職に就いたが、国一揆はなお衰えることなく続いていた。永享四年(一四三二)激しかった一揆は弟の用久もちひさの力によって平定された。この時、用久に出水郡を与えたので、用

久は、出水、高尾野、野田、阿久根の四ヶ城を領して、出水の亀ヶ城に居り薩州家を称した。

薩州家はその後七代忠辰ただとよに至る約一三〇年間、出水を領することゝなったが、その権勢は本家を凌ぐ程で、五代実久は、島津本家を奪わんとして失敗に終わったことさえあった。

七代忠辰は文禄二年（一五九三）、豊後、大友義統のよ
うに、朝鮮役における不首尾のため改易され、その弟忠
清、忠栄等国で捕えられた。島津義久はこの事件があ
って以来、薩州家の再興を許さなかった。このようにし
て薩州家は亡んだ。

この歴代薩州家の墓を、曹洞宗龍光寺菩提所に訪ねた。
ずらりと並んだ手のこんだ、然も一つ一つ刻銘された石



薩州家墓塔

塔婆（宝塔）、
その波乱に満
ちた当主達の
生涯を想起し
て切々と迫る
ものがあつた。
薩州家墓地
に竝んで更に
広い墓地が開
けていた。こ
の墓地で先づ
目につくもの
は、堂々たる

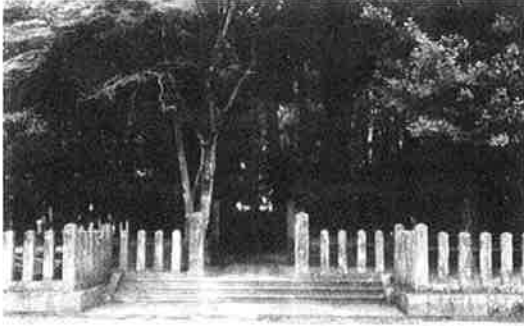
墓であつた。又この墓を指し示す「山田昌巖」の白い標
柱であつた。

昌巖は山田有栄のことで、名将山田新介有信の子であ
る。山田有信と言えば、天正六年（一五七八）大友、島
津の大軍が雌雄を決した高城の大戦において、我が大友
軍が大兵を以て猛攻すれども僅か数百で山田有信が立籠
る高城を攻めあぐみ、遂に之を抜くことが出来ず、之が
影響して、大友軍は大敗を喫したのである。佐伯軍とし
ても、梅牟礼城主佐伯惟教、惟真父子を始めとして、弥
生地区からも多くの戦死者を出した。大友軍が高城包囲
中、敵将山田有信には、待望の男児出産の情報が密かに
届けられ、高城軍は士気大いに挙げたと伝えられる。こ
の男児こそ山田昌巖なのである。余談になるが、この山
田有信は、天正十五年秀吉軍の部将、羽柴秀長は大軍を
以て、同じ高城を十重、二十重に、取囲んで猛攻したが
矢張り攻略することができず、本家島津軍が秀吉に降伏
して後、味方の強制によって漸く開城したと云う程の勇
将であつた。

一子山田弥九郎有栄は、福山地頭たること三十余年、
仏門に入って昌巖と改めていた。寛永六年（一六二九）

突然出水地頭を命ぜられて、この地で善政をしき、薩摩第一の名地頭として慈父の如く慕われた。白い標柱案内はよくこのことを物語るようである。昌厳は出水地頭たること二十六年、寛文八年（一六六八）九十才の高齢をもって他界した。

(三) 懐良親王御墓



懐良親王御墓

私共は八代市で、社会教育課を訪れて、いろいろと御案内をいただいた。八代城跡について懐良親王御墓に詣でた。御墓は、楠、桧、杉などの老樹が鬱蒼と繁る中に在る。

案内によると、西向で、東西二七・三米、南北二〇米の土居で囲まれた東に内玉垣があり、その中央にある小円墳が親王の御墓である。円墳の下は切石で囲まれ静かな聖域である。

昭和十五年、八代市郡有志や婦人会、青年団ら多数の奉仕と寄附金によって外苑がつくられて、神域の広大さを感じさせる。神韻縹渺たる雰囲気はいかにも懐良親王の墳墓にふさわしい。

親王は激動する南北朝期に、四国忽那島から興国三年五月（一三四二）忽那氏護衛のもとに薩摩の山川港に着かれ、谷山隆信の居城に入られて以来、心温まる暇とてなく波乱の御生涯であったように思われる。死後はせめて、この閑静の地で安らかに、御永眠下さるにふさわしい環境をつくってさしあげ度いと奉仕の人々は念じたに相違ない。

谷山城の親王一行は、島津氏等の反官軍との戦火に明け暮れ、官方に形成有利となった正平元年（一三四六）二月、中院義定をここ八代に遣わして、親王の肥後入りの準備をさせられた。館を構え、阿蘇惟時や恵良氏等の説得、菊池氏との連結等為すべきことは多かった。その

館が高田郷御所跡なのである。懐良親王が移ってこられたのは正平二年（一三四七）十二月十四日で暫らく御滞在になり、宇土を経て菊池に、更に太宰府に進まれた。南朝方の優勢もしばらくの間にすぎなかった。

その後、征西將軍職を良成親王に御代りになって引退された。

良成親王は、元中七年（一三九〇）宇土落城後に八代に入られた。ここで南北朝合一を迎えられたのである。

懐良親王は元中三年（一三八五）三月二十七日、五十才で亡くなり、現在地に御墓ができ、良成親王はこの墓前に、懐良親王の菩提寺として、中宮山悟真寺を創建されたのである。

あの大揺れに揺れ、乱れに乱れた、南北朝期の戦乱に生きた懐良親王こそ、悲劇の人というべきか。

我々の予定の見学は終わった。又小野英治氏の運転で、午后一時、八代を出発して、九州縦貫高速道路を走り熊本三里木あたりで五十七号線に移り午后四時すぎ、全員無事帰郷した。

（おわり）

東光庵の独歩文学碑

染 矢 勘 蔵

（佐伯市青山）

碑文

桜は己に散りたり。只落花紛々の景を賞するを得たりしのみ。吾等そのみにて満足したり。桜樹は二本あるのみ。されど何百年を経たりしとも知らざる老樹なり。なかなか世にめづらしき大木なり。立派なる庵あり東光庵と称す。

場所 佐伯市黒沢区東光庵境内

書及び選文 狩生熊義先生（佐伯独歩会会長・佐伯高校長）

碑身 高さ六七 cm 横八八 cm 奥行二〇 cm

台座 高さ五六 cm 横一一〇 m 奥行七〇 cm

佐伯史談会青山支部建立

昭和五十六年四月三日除幕

現在独歩の文学碑は、全国に二十数基を数えるという。若き日の独歩が佐伯で暮したのは僅か十カ月余に過ぎなかったが、こよなく佐伯の自然を愛し、寸暇をみてはし